NY エッセイ 103

中瀬有紀

国境を超えていく共鳴



折原美樹氏『レゾナンス-共鳴-3』の『ザ・クライ』にて

折原美樹氏のソロダンス公演『レゾナンス-共鳴-3』が、ラガーディア・パフォーミング・アーツで初演を迎えたのは、長い冬が終わってようやく春らしくなった5月の頭でした。27年間マーサ・グラハム・ダンスカンパニーで踊り、プリンシパルダンサーを務めた折原氏が、ソロ活動を始めて3度目のこの公演は5つの作品から構成されていました。演目順に高田せい子氏の『母』、ドリス・ハンフリー氏の『二つのエクスタティックなテーマ』、石井小浪氏の『月の砂漠』、マーサ・グラハム氏の『ラーメンテーション』、そしてユリコ・キクチ氏（芸名ユリコ）の『ザ・クライ』です。1963年に制作された『ザ・クライ』以外はどれも1930年代の作品です。アメリカと日本で同時期にモダンダンスが産声をあげ、歴史とともに全く異なる成長と遂げたそれぞれの芸術表現から人間について考える、『レゾナンス-共鳴-3』はそんな舞台でした。

高田・山田舞踊研究所で学んだ折原氏が、短期留学のためにニューヨークへ単身渡ったのは、1979年です。ジョフリー・バレエ、アルヴィンエイリー・ダンスセンター、そしてマーサ・グラハム・スクールでバレエ、ジャズ、モダンダンスを学び、もうすぐ帰国というときに受けたグラハム・スクールのワークショップが、彼女の進路を決めます。それはマーサ・グラハム・ダンスカンパニーのプリンシパル・ダンサーだったペギー・ライマン氏とピーター・スパーリング氏のクラスで、彼らとの出会いが彼女をグラハム・スクールそしてマーサ・グラハム・ダンスカンパニーへと導きました。当時、アメリカ人以外のダンサーはオーディションに参加することすら難しく、受付けで入室を許されずにいた折原氏を受け入れるよう話をつけたのもライマン氏です。そして1981年、折原氏の運命を変える出会いがグラハム・スクールで待っていました。折原氏にとって舞踊の師匠のみならずアメリカでの母となる、ユリコです。「踊るのが好きと考えたことはあまりないけど、踊るのがいつも楽しかった」と話す折原氏から、ユリコをはじめとする素晴らしい舞踊家との出会いが、彼女の充実した舞踊生活40年を築いたのだと感じました。

アメリカと日本、2つの文化間を行ったり来たりしながら、どちらに完全に依存するわけでもなく2つが混ざり合う『レゾナンス-共鳴-3』は、折原氏の人生を描写するような構成でした。確かに、西洋美術と東洋美術の歴史を見比べると、概して「平面描写をいかに立体的に見せるか追及する西洋」と「平面の連続美を極める東洋」と言えるかもしれませんが、葛飾応為の光の描写やアンディ・ウォーホルのシルクスクリーン画などその枠にあてはまらない作品もあり、作品の出身地だけで芸術を種類分けするのは浅はかかもしれません。しかし、折原氏の選んだ5つの作品においては、1点だけアメリカと日本の舞踊が明かりに求める違いが明確でした。それはフロントライト、演者を正面から照らす明かりです。『母』と『月の砂漠』の振り付けでは、折原氏が客席すなわち正面を向いている時間が長く、腕の動きで顔が影ることが不適切で顔の表情もしっかり見たいと感じたために、フロントライトを多用しました。逆に『ラーメンテーション』では、初期のアイデアでは顔の表情と衣装（布のチューブ）の色を引き出すためにフロントライトを少し入れていたのですが、ふとフロントライトを消してみたときにチューブに落ちる影が踊り出し、陰影が作品の悲哀を表現しているように見えました。

『レゾナンス-共鳴-3』の照明デザインはたくさんの方の支えによって完成したことを、この場をお借りしてお礼申しげます。私にお声がけくださった折原氏、私を推薦してくださった照明家のクリフトン・テイラー氏、片岡康子先生、山田奈々子先生、米井澄江先生、舞台監督のマキシン・グロースキー氏、そして両親、私を支えてくれているすべてがこの作品に繋がっています。私はこの公演を通じて、舞踊は私たちに国と文化を超えて共鳴することを許してくれる、数少ない手段の1つだと再認識しました。